

第二次世界大戦後における中国東北地区居住 朝鮮人の引揚げの実態について

李 海 燕

はじめに

近代における朝鮮人の満州¹⁾への移住は、19世紀後半、1910年の「韓国併合」、1932年の「満州国」の成立を境に、三つの時期に大きな波をなしている。19世紀後半には朝鮮人は、すでに春に豆満江（中国側では図們江という）を渡って間島で耕作するようになっており、秋の収穫を終えると朝鮮に帰る者や、昼だけ間島で農作業をする者などがいた。清国は、1881年に間島に対する封禁政策を廃止し、1885年にはさらに間島を専墾区と設定して、移民を歓迎した。一方、朝鮮も1883年に豆満江封禁令を撤廃し越境を奨励したことで、朝鮮人の間島への移住は急速に進んだ。移住の原因は多くの場合、朝鮮での生活難によるもので、朝鮮北部の農民が一家を挙げて移住するケースが大半で、朝鮮で飢饉が起きた年には移住者が増える傾向が見られた。

「韓国併合」前後には、政治的理由から逃れてきた人々もいた。朝鮮内で展開された義兵部隊の一部が満州やロシア極東領に逃れ、そこを拠点に抵抗を続けたことがその例である。彼らは、移住農民の子弟に対する教育活動を基盤にして、独立運動の勢力を拡大させ、三・一運動後には満州で活発に武装闘争を展開していた。

「満州国」成立後は、日本による政策的移民²⁾を中核として、満州への朝鮮人移民は急速に増大して（[表1]を参照）、解放直前には200万人前後となった。

1945年の中国東北地区解放は、日本の植民地統治から解放された東北地区居住朝鮮人³⁾に無限の喜びをもたらした。朝鮮人の多数居住している延吉、ハルビン、瀋陽、通化、牡丹江などでは集会を開いて、解放を祝った⁴⁾。しかし、解放の喜びと興奮とは長続きしなかった。それは、東北地区居住朝鮮人を取巻

く生存環境が厳しくなってきたからである。

本稿は、以上のことを踏まえて、第二次世界大戦後に行われた中国東北地区居住朝鮮人の自主的或いは行政機関の援助を得た朝鮮への引揚げの実態について論述したい。

一、東北地区居住朝鮮人を取巻く環境

解放後の中国東北地区は、権力の真空状態となって、無秩序であった。都市では、一応はソ連赤軍が治安を維持していた⁵⁾が、東北地区居住朝鮮人の8・9割が居住していた農村は無政府状態で、事実上「土匪」（以下、「⁶⁾」を取る）たちが支配していた。

土匪は、日露戦争後から中国東北地区で活動しはじめたという。解放後の土匪は、おもに解体された「満州国」の警察・憲兵、地主武装、地元のヤクザなどで構成され、日本の敗戦時に民間に流入した武器を獲得して、一層活発な活動をしていた。とりわけ、1945年11月に国民党軍が東北地区に進出してから、1946年5月ソ連赤軍が東北地区から撤兵するまでの半年の間、土匪の活動はもっとも活発であって、その規模をみると、1945年12月現在10万人ほどの土匪が東北地区で活動していた⁶⁾。中国共産党（以下「中共」と略称）は、1946年6月から土匪に対し、全面的な闘争を展開して、1947年12月それを終わらせた。

この間、これら土匪は、「朝鮮人は日本鬼子⁷⁾の共犯」という理由で、「朝鮮人を全部追い出」そうと、一般の朝鮮人大衆に対し、迫害ないし虐殺を行った。半世紀も経った今日に至っても、「問題の語りづらさ」⁷⁾のため、当事者たちは襲われたり、財産を没収されたりした当時のことをあまり語りたがらないという状況であって、問題の重大性にも係わらず、これまでの研究のなかでは言及されていない。

ところで、移住年代と移住性格の違いにより、解放後における朝鮮人を取巻く環境は、北満州・南満州・延辺と呼ばれる地域によって、若干の差があることを指摘する必要がある。以下、この三つの地域の具体的な状況を考察することとしたい。

1. 北満州

解放後、東北地区居住朝鮮人社会に引き起こされたさまざまな混乱と悲劇の度合いは、朝鮮国境に近い延辺よりも、北満州に入植させられた朝鮮人開拓農民に強い。それは、朝鮮人開拓農民の北満州への入植⁹⁸によって、現地中国人の土地が奪われたことが主な原因であろう。また、北満州は東北地区のなかでも、土匪がもっとも活躍した地域であって、1947年4月現在北満州の3分の2以上の県城は土匪に掌握されている⁹⁹状況であった。

解放直後の1945年の秋は土匪が活動しはじめた時期で、北満州朝鮮人事情に詳しい元一禹⁹⁹がのち中国朝鮮族のリーダーとなった朱徳海⁹⁹に報告したように、「現在、北満州の農村は土匪たちに掌握されています。彼らは朝鮮人を見ると全部殺します。少なくない地方の中国人は朝鮮人を日本人の手先だと言って追い出します。そして、居場所がなくなった朝鮮人はハルビンに流れ込んで、また朝鮮に戻る⁹⁹」という状況であった。

解放後、土匪による迫害とりわけ虐殺が行われた具体的な場所、時間、人数などについては、完全な統計を作成することはできないが、生き残った人たちの証言からその一側面が伺える。

村民が全体的に虐殺されたケースとして、牡丹江地区のオハリムという村がある。リキョンフム⁹³さんの話によれば、日本の敗退後「牡丹江一帯には謝文東⁹⁶という有名な匪賊の頭がいて、奴の率いる匪賊は朝鮮人を日帝統治下の「二等公民」だと言って、見つけると斧で殴り殺していた。オハリムという朝鮮人村が奴らによって全滅させられ⁹⁶」たという。

また、朝鮮人村が土匪たちに襲撃されて、村民の一部が彼らに殺害、略奪、暴行されたケースは、普遍的であった。例えば、姜聖仁⁹⁶さんは、解放後自分の住んでいた村の状況について、「日本人開拓団に対して現地の土匪が襲撃してきましたが、朝鮮人も襲撃を受け、わたしの部落でも2人殺されました。（土匪たちは一筆者注）大勢で押しかけて来るので、一度襲撃を受けると悲惨でした。襲撃を恐れて朝鮮に引揚げ人も大勢い⁹⁶」たと述べている。

1946年の春、ソ連赤軍が東北地区から撤兵し始め、国民党は長春・四平など戦略要地をめぐる中共との戦いに勝利するが、それは土匪たちを元気づけ、土匪の朝鮮人に対する暴行はさらに拡大した。そのなかで、「5・26 東安虐殺

事件」⁹⁸ が起こった。1946年当時、東安（現黒竜江省密山市）には武装した郭興典土匪部隊があり、彼らは朝鮮人を恨んで常に苦しめた。例えば、5月14日の深夜、郭匪賊は東鮮、東明、東興など3個の朝鮮人村の老若男女をほとんど虐殺し、家屋は全部焼いた⁹⁹。26日の夜、700余人ほどの郭興典土匪部隊は、城内の漢族住民たちを扇動して、内外で呼応して、急に東安城を襲撃した。彼らは、入城後「朝鮮人の種を無くす」と言いながら、普通の朝鮮人住民に対し無差別な大虐殺を行った。一日で数百人が殺害され、数百戸の朝鮮人が財産を捨てて、ソ連と朝鮮に逃げ、駅の隅には朝鮮人の死体が山のように積もっていた。以上が、「5・26東安虐殺事件」の大筋であるが、東安の付近の朝鮮人村も襲撃されたが、幸いみなうわさを聞いて避難していた。

この他にも、土匪の朝鮮人に対する蛮行は数多く起こった。例えば、1946年の春、五常県の陳喜廷という土匪頭目は「朝鮮人は全部殺せ」と部下に指示して、朝鮮人村に対し蛮行を行った¹⁰⁰。

以上のように、1947年末中共が北満州の土匪を大部分消滅させるまで、そこに居住していた朝鮮人は、しばしば土匪たちに襲撃される厳しい環境に置かれていた。こうした厳しい環境から逃れようと、彼らは多年来開拓してきた水田、家屋を捨てて、ハルビン、牡丹江、チャムス、チチハルなどソ連赤軍が治安維持をしていた都市と朝鮮人の多い延辺に避難せざるを得なかった¹⁰¹のである。それは、また、当時中共の東北地区での大物幹部である周保中が述べたように、解放後「朝鮮に帰った人のなかで、北満州平原および松花江下流から帰還した人がもっとも多」¹⁰²いという結果をもたらしたのである。

2. 南満州

南満州は、朝鮮人が分散して居住している点では北満州と共通するが、一部の地域はしばらく国民党の統治下に置かれていたことが特徴である。

大連の付近から南朝鮮の故郷に引揚げた高元鶴という人の書いた「避難記」¹⁰³によれば、解放直後の南満州の「各地には暴民が流動して、いつでも危険な状況」であった。例えば、8月22日に大連付近の登沙河、杏樹屯その他近村は全部中国人に襲撃されて、日本人はもちろん朝鮮人も打ちのめされ、死者、重傷者が多数発生したと書いている。

こうした混乱状態のなかでも土匪による実際の被害も多かった。ある朝鮮義勇軍隊員の回想記には、11月、朝鮮義勇軍が遼寧省清遠というところを経過した時、付近の朝鮮人の老若男女に強く止められたと書かれている。その理由は、「朝鮮人軍隊でしょう。みなさん、あなたたちが残って、わたしたちを守ってくれないと、わたしたちは全部殺されます。土匪たちがいつでも進撃してきます」⁹⁰ ということであった。

土匪以外に、南満州に進駐した国民党の正規軍も、現地民特に朝鮮人に対し、略奪をほしのままにした。キムリスク⁹¹さんは、「日本が敗れて国民党が入り込んできた。あらゆる物を略奪し、朝鮮人という片っ端から物を奪って…家を取り囲み銃口を突きつけて、白米を出せって言うのだ。それで一年間働いて得た収穫をすっかり持って行かれ」⁹² と、国民党軍隊の暴行を訴えている。

また、解放後国民党占領区における韓国僑民代表大会での報告によれば、「瀋陽付近およびその他地域では中国軍警が朝鮮人村にきて「お前らは八路匪だ」と叫んで、金品を強要することが多」⁹³ く、現地で生活を営むことが困難であった。

解放後の南満州で起きた代表的な朝鮮人虐殺事件としては、「長春「5・23」惨事」⁹⁴ と「吉林「5・28」惨事」⁹⁵ を挙げることができる。

1945年末からの国民党軍の東北地区の大都市および幹線交通路への進駐に伴い、中共中央は東北局に対し、東北地区での活動の重点を広大な農村に置くように指示したが、東北局の指導者の李立三らはそれに従わず、1946年3月に四平、4月に長春を占領した。重要大都市をつぎつぎに失った国民党軍は大攻勢に出て、両軍が激戦を展開した結果、5月22日から中共軍は長春、吉林から撤退し始めた。1946年春に行われた上述の戦闘に、朴洛権を団長とする朝鮮人部隊の東北民主連軍吉遼軍区第1旅第1団の2,000余人が参加して、先頭で戦った。朝鮮人部隊の活躍ぶりは、国民党側を刺激して、それは、ついに朝鮮人大衆に対する虐殺ヘエスカレートしていくのである。

「長春「5・23」惨事」の契機は、朝鮮人兵士1人が長春から撤退する途中、中国人老人からタバコを買って、その代金をソ連赤軍軍票で払ったが、老人に断られ、現金を払うように要求された。そこで、二人はけんかになって、朝鮮人兵士は中国人老人を銃殺した。隣家の中国人青年がこれを見て、朝鮮人が中国人を殺したと叫び出し、周囲の中国人は興奮して、朝鮮人に対する無差別な

報復を始め、その場で朝鮮人 100 人を殺し、また 300 人が行方不明となった⁹⁹。そして、5月23日の午後3時から、変装して潜伏していた「反動分子たち」が先に立って、真相を知らない「不良輩」たちがそれに協力して、共産党の密偵を調べるといふ名目で、朝鮮人を検挙、逮捕した。とくに長春市第七大通路に多数居住していた朝鮮人たちはひどい目にあった。暴徒たちは突然朝鮮人の家に入って略奪を行って、共産党だという罪名で、町なかを引きずり、打ち殺した。この日の夜、第七大通路は虐殺の修羅場と化した。翌日、ヨンラク小学校（朝鮮人学校—筆者注）のグラウンドには40余人朝鮮人の死体が置かれていた。それは暴徒たちの暴行によって、銃殺或いは打ち殺された朝鮮人の死体だった。続けて、5月25日も60余人の朝鮮人が逮捕され、「暴民」という罪名で、町を引きずり回された。

「長春「5・23」惨事」の連鎖として、「吉林「5・28」惨事」が起こった。国民党第88師が吉林市に進駐した5月28日の夜、国民党軍は地元の中国人の案内を受けて、吉林市の朝鮮人の家を捜し回った。「高麗人は、皆共産党で八路軍」だという理由で、吉林市の朝鮮人は捕まえられ、蹂躪された。男性はほとんど「集中營」に集中させられて、200余人は老爺嶺トンネルを修理する苦役に、100余人は吉林市西側の防衛工事の苦役に、100余人は吉林鉄道局地下室で審問を受け続け、その他は市内の各派出所、兵役処で拷問を受けた。朝鮮人女性に対する暴行は甚だしく、少女も老婦人も障害者もそれを免れることはなく、「その日も、その次の日も無茶苦茶な蛮行は朝鮮人が住んでいるところで広げられ」た。

解放後に、南満州の朝鮮人社会で発生したさまざまな悲劇は、その地に居住していた朝鮮人を深刻な不安に陥らせ、「避難の道をたどる人は数知れなかった。瀋陽、営口には数万人の朝鮮人が集まって、鴨緑江を渡る難民は後を断たなかった」¹⁰⁰ という結果をもたらしたのである。

3. 延辺

延辺は、解放直後から中共側の軍隊が進駐して、治安を維持し、またその八割の人口が朝鮮人であることもあって、東北地区のほかの地域より、朝鮮人の被害が少なかった。しかし、中共の軍隊が1946年7月に延辺の土匪を消滅さ

せるまで、延辺でも土匪による朝鮮人の虐殺が行われた。その代表的な事件は、汪清県羅子溝での朝鮮人虐殺である。1945年11月に馬喜山⁹⁰、王慶雲を頭目とする土匪たちは「高麗人を全滅させる」と叫んで、汪清県羅子溝で、一回に朝鮮人大衆100余人を虐殺した。また、土匪たちが朝鮮人村に侵入して、衣服、糧食、金品などを略奪し、若い女性に暴行することも日常茶飯事であった⁹¹。

土匪による被害は東北地区の他の地域より少なかったものの、解放後の延辺では民族矛盾による民族の対立ないし衝突の発生が問題となっていた。周保中は、1946年12月に行った「延辺朝鮮民族問題」という演説のなかで、「敦化地区と延辺の具体的状況からすると、中国人は三等国民だったから、解放当時、一般的に報復心理が存在した⁹²」と指摘している。また中国朝鮮族のリーダーである朱徳海も、「従来、毎日のように民族間の紛争があった⁹³」と日本朝鮮研究所代表団に率直に認めている。

1945年8月18日、延吉では日本軍を退けたソ連赤軍を歓迎するパレードが行われたが、その途中、40才ぐらいの漢族中年男性が日本人は1等民族で、高麗人（資料の原文による）は二等民族であったから、高麗人も侵略者だと呼びながら、財産を置いて、自分の国に帰れと言った。それに同調する漢族もいる一方、対抗しようとする朝鮮人青年もいて、大喧嘩になりそうであった⁹⁴。解放後、延辺の中国人の中には、朝鮮人を駆逐する動きが存在したということであろう。

しかし、前述したように朝鮮人の多数居住している延辺は、東北地区の他の地域より遥かに安定していて、延辺の課題は、むしろ北満州の奥地に居住していた避難者の殺到で生じた住宅・食糧の不足であった。

上述したように解放直後に東北地区居住朝鮮人が厳しい環境に置かれた根本的な原因は、日本の満州支配によるものであることを指摘する必要がある。解放前までに在満朝鮮人と中国人との間では、日本の侵略に抵抗するという面で協同・連帯が模索されてきたが、全体的には中国人の朝鮮人に対する感情は良好ではなかった⁹⁵。日本帝国臣民としての朝鮮人が中国に移住し生活することに対する警戒感が強かったのは、ある意味では自然であった。それに、日本は中韓両民族に分化政策を施して、「日本帝国主義の反動統治が行われた14年間、両民族は対立の状態⁹⁶」であった。それが、解放後に一部の「反動的な中国人」を煽りたてたのである。

二、引揚げの実態及び残留の原因

1. 引揚げの経路と人数

解放後における東北地区居住朝鮮人の朝鮮への引揚げの経路については、資料が乏しいため、明らかにすることは困難である。ただ、『朝鮮年鑑 一九四八年版』には、1947年7月まで南朝鮮に引揚げた人たちの経路について、[表2]のような統計が出ている。

北満州地区居住朝鮮人は解放直後に厳しい環境に置かれていて、彼らはまず同胞たちが多数居住している延辺に流れ込んで、そして延辺から豆満江を越え、朝鮮へ引揚げることが多かった。リキョンフムさんの話しによれば、「1945年11月に家族を連れて図們に向かった。その頃図們には故郷に帰ろうとしている朝鮮人がたくさん集まっていた⁹⁸」たという。

南満州地区居住朝鮮人は、主に地理的に近い安東、通化などを経て、朝鮮に引揚げたと考えられる。この他にも、大連、天津などから引揚げた者もいた。例えば、解放前に大連から300里離れている金城県清水河に居住していた高元鶴は、故郷の大田^{テジョン}に帰ってまもなく、「避難記」⁹⁹と題する引揚げ日記を発表したが、彼は大連付近の皮口という港から朝鮮の新義州に入ったのである。高によれば、解放直後、清水河付近の村では、日本人と朝鮮人が多数被害を受けて、清水河も危急な状態に置かれていて、9月1日に家族を連れて、清水河を出発して、2日に皮口に着いたという。高は、皮口から新義州までの代金として1万3千円を中国人船夫に払って、8日船に乗って、皮口を出発した。14日鴨緑江に入ったが、満州側の江辺には避難民が殺到して、鴨緑江を渡っていることを目撃し、15日ようやく新義州に着いたが、全新義州が避難民であふれていたと書いている。

解放後東北地区居住朝鮮人の朝鮮への引揚げの時期と人数については、解放直後の混乱のため、その正確な把握が困難である。

ここで、まず解放直前における在満朝鮮人の人口を知る必要があるが、これについてもさまざまな説がある。「満州国」が行った人口統計によれば、1945年6月1日現在在満朝鮮人人口は2,163,115人¹⁰⁰で、この統計数字はその後よく使われた。例えば、国民党の東北行轅韓僑事務処主任の張剣非はこの統計数字

を引用している。しかし、『朝鮮年鑑 一九四八年版』は、在満朝鮮人人口は実際において、それを「ずっと上回っている」⁴⁸となっている。そして、それに近い数字としては『漢城日報』の解放当時 230 余万人⁴⁹という説と、「東北収復区全僑民大会で報告された各地韓僑の現況要略」に出ている 1944 年 7 月現在 231 万人⁴⁸という説がある。この他に、大韓民国臨時政府東北特派員の崔泰山は、解放直前の在満朝鮮人人口は 270 万人⁴⁸だと書いていて、満州帰還同胞同志会の徐範錫は、解放前東北地区には朝鮮人が 300 余万人居住していた⁴⁸と書いているが、これらの数字は誇張の疑いがある。筆者は、解放直前の在満朝鮮人人口を 216~230 万人だと推測する。ただし、残念ながらそのなかの常住人口数が把握できない。地域別に見ると、解放直前朝鮮人の集住していた延辺には朝鮮人が約 70 万人居住していて、そのほとんどは「満州事変」以前から移住してきたため、すでに定着していた⁴⁸。延辺の朝鮮人人口は、1946 年 12 月に 59 万人⁴⁸であり、その後も大きな変化が見られない。

解放後に東北地区居住朝鮮人は次々朝鮮へ引揚げたが、続いてその年度別の引揚げ人数について検討してみよう。解放してから一年間は、東北地区居住朝鮮人がもっとも多く引揚げた時期である。『漢城日報』によれば、東北地区の解放と同時に 1945 年末まで 529,301 人が南朝鮮に帰還し、1946 年には 185,541 人が南朝鮮に帰還した⁴⁹。つまり、解放から 1946 年末まで、総計 714,842 人が南朝鮮へ引揚げたということである。また、『東亜日報』は、解放して 1946 年 9 月まで、60 万人が東北地区から帰還した⁵⁰と報道したが、これは『漢城日報』の報道した数字とそれほど差がなく、1946 年末まで 70 万人以上が中国東北地区から南朝鮮に引揚げたと言える。

1947 年に入っても、引揚げが続いた。南朝鮮軍政庁外務処の調査によれば 6 月 1 日現在、解放以来中国東北地区から帰還した人数は 504,391 人で、その他公的手続きなしに帰還した者も少なくとも約 60 万人（日本、南太平洋諸国を含む）を越えていた⁵¹という。『漢城日報』は、1947 年初から 11 月までは 124,226 人が朝鮮に帰還して、解放後から 1947 年 11 月まで総計 839,068 人が中国東北地区から南朝鮮に引揚げた⁵²と報道している。また、『独立新報』によれば、解放後から 1947 年 11 月まで 80 万人が東北地区から南朝鮮に引揚げた⁵³というが、それは『漢城日報』の報道した数字に近い。以上からすると、解放後から 1947 年 11 月までに少なくとも 80 万人以上が中国東北地区から南朝鮮

に引揚げたことになる。

中華人民共和国が成立して、はじめて中共の文書に表れた、東北地区居住朝鮮人状況に関する詳しい統計は、1951年1月に出された「東北区朝鮮民族人口職業情況」である。これによれば、1951年1月現在東北朝鮮民族は（資料の原文による）225,504戸、1,068,839人であって、その61%は現在の吉林省に居住しており、またその9割以上は農業に従事していたが、これが中国朝鮮族の初期の輪郭だといえる。

2. 残留の原因

上述したように、解放後の1年間を中心に新中国が成立するまでに約100万人前後が朝鮮へ引揚げた。そのなかで、解放前に南満州に居住していた朝鮮人は大部分が帰還した⁶⁴が、その原因について、国民党東北行轅韓僑事務処主任秘書の袁常恩は、「ある韓僑は一貫して悪い行為をして国人（中国人のことを指す一筆者注）の報復を恐れ、ある韓僑は資産がかなりあって治安の未回復を心配し、ことに祖国の光復を憧憬して、早々帰国し」⁶⁵と書いている。

また、在満朝鮮人人口の3分の1を占めていた延辺に居住していた朝鮮人は、ほとんど「満州事変」以前に移住してきて、解放当時はすでに定着していたため、朝鮮へ引揚げることは少なかった。

一方、問題になるのは解放前北満州に居住していた朝鮮人であるが、彼らの残留の原因を探求してみる必要がある。その原因としては、まず交通の断絶が挙げられる。東北地区の主な交通手段は鉄道である。解放後、東北地区の鉄道はしばらくソ連赤軍の軍事管制下に置かれていたが、いくつかの鉄道線は麻痺状態であった。例えば、土匪の馬喜山、王慶雲などは汪清県老松嶺を占拠して、北満州から延辺への交通を切断した。したがって、牡図線と図佳線の一部は断絶されていたが、この二本の鉄道線は北満州の朝鮮人の多数居住している牡丹江地区と合江地区から延辺に入る重要な鉄道線であった。牡図線は1946年8月26日から運輸を回復した⁶⁶。延辺のなかでも、解放後しばらくの間は汽車が通らず、1946年1月になってから境内の4つの主な鉄道線が通じる⁶⁷ようになった。また、1945年末に単秉義という土匪は安図県を占拠して、南満州と延辺の交通を一時中断させた。

交通の断絶で、朝鮮に引揚げることができなかったことは、当事者の証言からも伺う事ができる。宋求憲⁸⁵さんは、「解放後、私たちの開拓村でも、帰国しようという思いは皆の気持ちとしてありました。…村を出て、10月のある日(1945年—筆者注)に駅に行きましたが、汽車も動いておらず、動くに動けないという状態でした。それで、また村に帰ってくるということを何度も繰り返して」⁸⁶ いたと証言している。汽車が通っている地域においても、旅客列車は見られず、たまに軍用列車があるが、こうした列車も土匪の襲撃を受けることが多かった。

また、戦争のため中共と国民党はそれぞれ自分の占領区で移動のための証明証を必要とする制度を実施していたが、この制度も朝鮮人の引揚げに影響を及ぼした。まず、解放区(共産党占領区を指す—筆者注)においては、解放後農村の土地改革を保護し治安を維持するため、住民、商人、旅客に対し、旅行証制度を実施していた⁸⁷が、旅行証制度は解放区の農民で「県外30里以上或いは省の境界を出る者は…区政府から旅行証を発給してもらわなければならない」⁸⁸と規定している。

国民党占領区でも「通行証」制度が実施され、一つの駅から他の駅に移動するにはかならず通行証が必要で、日常生活に不便と不自由が甚だしかった⁸⁹。国民党政府は指定された場合を除いて、各地の韓僑は随意移住することはできないと規定していたのである。韓僑が東北各地を旅行する時は、韓国僑民会の証明を経て、県市政府民政科或いは警察局外事科の調査を受けてから、旅行が許可された。

また、解放区と国民党占領区との間は完全に隔離状態であった。このことは、1946年12月東北韓国僑民代表申肅⁹⁰・高文竜⁹¹が上海を経由して南朝鮮に帰還した際に、記者に中共占領区在住の同胞の消息はまったく知らないと言った⁹²ことから推察される。

解放後、およそ東北地区居住朝鮮人の8割は解放区に居住していたが、共産党が朝鮮人に定着を勧めたことも残留の原因となった。中国朝鮮族のリーダーである朱徳海は、「朝鮮に戻れる人は戻って、戻れない人は満州に定着する二つの道しかない」⁹³と考えていたように、中国共産党は帰れない人にたいしては、満州に定着させる方針、すなわち解放直後混乱状態に陥っていた朝鮮人に対して「帰農運動」を展開し、土地を分配するなど積極的に定住の条件を創っ

たのである。

「帰農運動」とは、都市に避難してきた大量の難民を農村に送って、農業に従事させて、徐々に定着させて行くということである。例えば、共産党牡丹江当局は朝鮮人帰農工作隊を組織し、計画的に帰農運動を行って、彼らを林口、勃利、穆稜、東寧などの農村に移住させた⁶³⁾が、これについて中共牡丹江地委の機関紙である『人民新報』は何回にかけて、報道をした。

東北地区における土地改革は1946年3月に中共東北局が「中共中央東北局の日偽土地を処理することに関する指示」を下達したことから始まる。1948年春になって、朝鮮人の多数居住している延辺と黒竜江省では土地分配が終わって、黒竜江省のハルビン周辺の40,548戸の朝鮮人は53,928畝の水田を分配され、1戸辺り平均1.3畝の水田を分配された⁶⁴⁾。朝鮮人に土地所有権を与えたか否かについては地域によって異なるが、とりあえず朝鮮人は土地を分配されて、東北地区で生活していくことが可能となった。

上述した原因を客観的原因だとすれば、次のような個人的理由も挙げられる。まず、朝鮮に帰っても何の財産も、生活する場もない人々は、現地に残ることを自主的に選択したことが多い。例えば、許永久さんは、「解放後、故郷に帰る気持ちはありませんでした。わたしが満州にきた翌年、弟とともに父親たちもわたしのところに移住してきて、その時、故郷にあった、財産すべてを処分してしまったので、帰りたくても帰るところがなかったからです」⁶⁵⁾と東北地区に残った原因を述べた。

このように、自主的に東北地区に残ることを選択した人々もいるが、朝鮮に戻りたくても旅費がなくて、東北地区に残らざるを得なかったケースも多い。キムスクキョン⁶⁶⁾さんは、解放後の1945年に「たくさんの人が家から何から一切を捨てて故郷に向かった。わたしも故郷のことが懐かしかったけど、金がないからどうすることもできな」⁶⁷⁾かったと述べていて、姜聖仁さんも、「敗戦の混乱時、少し豊かで朝鮮まで帰る財産のある人は皆、帰りましたが、わたしたちのような貧乏人は帰るに帰れず、そこに残りました」⁶⁸⁾と同様なことを述べている。また朝鮮総督府が直接管轄していた河東安全農村⁶⁹⁾を見ても、金のある者は朝鮮に帰るといって延辺に向かったが、大部分の人は鄭判竜⁷⁰⁾さんの述べているように、「朝鮮に戻ろうとしても、この遙かな北満州の地から朝鮮まで行くには、少なくとも数百元は必要だろうが、そんな金はな」⁷¹⁾だったので

ある。

経済的理由の他にも、迷いに迷った末に東北地区に残った人も多く、誰もが祖国に帰ろうか、どうしようかという迷いのなかで日々を送っていた。李将範⁸⁶さんは、「解放後、すごい混乱で開拓村の人も京畿道の故郷に帰ろうと、家中の荷物をまとめて家の前に積んでおいたもんだよ。村の人は皆がそんな状態だったんだが、お互いに顔を見合わせて、お前が行くなら俺も行くからと、誰もすぐに発とうとしなかったもんだ。混乱の最中、幼い子供を連れて帰れるかどうか不安でどうしていいのか皆、判断しかねていたんだ⁸⁷」と述べていたが、ぐずぐずしているうちに共産党がやってきて、安心しなさいということで、東北地区に残留することとなったのである。

もう一つの残留の原因としては、息子たちが日本軍に徴兵され、解放後、その息子たちを待ち続けるため、東北地区に止まった人々である。例えば、日本の敗戦直前に徴兵されて、吉林の日本軍に入営した姜相竜さんによれば、解放後軍隊は解散して、仲間の朝鮮人も日本人もみな、故郷に向かっていて、自分も南朝鮮の故郷に向かったという。汽車が動いていないため、歩行で1ヵ月もかかって、慶尚道晋州の故郷に辿りついたが、親も兄弟たちも北満州から帰ってこなかったため、また、北満州の親たちのところにたどりついた。解放後、北満州の朝鮮人の多くは故郷をめざし南下したが、「母親がわたしが軍隊から帰ってくるのはこしかないと言って、わたしたちがここを出発するとあの子は帰るところがなくなると動こうとしな⁸⁸」かったため、姜さんの家族は東北地区に残ることとなったのである。

三、 国民党占領区における「東北韓僑送還計画」

上述したように第二次世界大戦後に東北地区居住朝鮮人のなかでは自主的引揚げが行われたが、このほかに国民党政府は自分の占領区において「東北韓僑送還計画」を行った。この計画の詳細を考察するためには、解放後国民党占領区における朝鮮人の事情を知る必要がある。

国民党占領区における朝鮮人の人口は、1947年6月に202,131人で、当時の東北地区居住朝鮮人人口の6分の1を占めていた。同年の夏以後は国民党占領

区の面積の縮小により、人口は減少しつつあり、1947年10月には、86,656人しか残っていなかった。

国民党占領区における朝鮮人の8~9割は農民であるが、鞍山、瀋陽、鉄嶺などにある大規模の集団農場は戦乱のため、正常な状態を回復しておらず、個人所有の小規模な水田は土地所有権をめぐる紛糾、資金の欠如などの原因で耕されていないため、生活が困窮化した者は増加していた。都市の商工業者も戦乱のためほとんど失業状況であった。極貧状態の者は国民党占領区内の朝鮮人の4分の1を占め、それは「東北の目前における嚴重な問題」⁸⁹となっていた。

解放前には中国関内地区（山海関以内一筆者注）にも朝鮮人が居住していたが、国民党政府は1945年12月に彼らを強制的に集結させて本国へ送還することを決定し、1946年上半年期までそれを実行した。その理由は、彼らの存在が中国社会不安の要素となることと、中共勢力の土台になる可能性があるということであった。中国関内地区における朝鮮人と日本人の送還作業⁹⁰がほとんど完了してから、国民党政府は東北地区居住朝鮮人と日本人の送還作業を開始した⁹¹。

実際、解放直後国民党中央設計局（総裁は蒋介石一筆者注）が提出した「東北復員計画綱要草案」の16条には、「日本籍移民は一律に駆逐し、日本による東北地区支配の下、東北に移入した韓人は帰還を命令」⁹²することとなっている。また、1946年4月出された「国民党東北保安司令長官司令部の韓僑処理臨時弁法」の第3条は、「生産に従事しないで、正当な職業がない韓僑は全部期限を定めて召集し、帰国させる」⁹³と規定している。

1. 申肅と「第1次東北韓僑送還計画」

1946年は自然災害のため南満州の農業は減産し、その上国民党が食糧の供出をさせて、食糧が不足することが多かったために、帰国希望者が多数出た⁹⁴。そこで、申肅は8月に東北韓国僑民総会の総会長に就任すると同時に、帰国希望者のため本国に派遣する代表を選出し、申肅と朴元陽⁹⁵、高文竜が選出された。

11月、上記の3人は天津に到着した後に、東京連合軍最高司令部駐天津出張所を訪問して、極貧状態にある10,000~15,000人の韓僑に対して、少なくとも

も1946年末までに、船舶を送って、南朝鮮へ輸送することを要請した。米国人所長はこのようなことははじめて聞くと言って、北京の難民輸送の責任者を紹介してくれた。北京の難民輸送の責任者は難民輸送は1946年末までに完了する方針が定まっているが、南洋に行っている船舶を葫蘆島⁸⁶に回すことを約束した。しかし、朝鮮への輸送者は「解放前韓国北緯38度線以南に居住した者に限定する」⁸⁷こととなっていた。

ところで、実際に国民党占領区に分散している韓僑を葫蘆島まで輸送したのは韓僑事務所であった。その輸送経過を見ると、1946年12月15日以前に帰国希望者を瀋陽収容所に集めて、22日瀋陽を出発して、23日に葫蘆島に到着して、港の検査所で検査を済ませた後、同日乗船した。そして、24日葫蘆島に待機している船舶に乗って、南朝鮮の仁川・釜山の二港に上陸した⁸⁸。送還人数は、最初は15,000人の計画であったが、時間が緊迫し、天気も寒く、船舶の到着も予定より早いため、瀋陽に集まることができた韓僑はわずか2,492人しかいなかった。そのなか、6人の病死者と退所者3人が出て、最終的に送還した韓僑は2,483人であった。

しかし、以上のように送還人数が少なかったのは、1946年秋、大韓民国臨時政府駐華代表団⁸⁹から派遣されてきた東北弁事処代理処長李白建が、大韓民国臨時政府駐華代表団は「僑民に関するすべての問題を解決することができて、安心して暮らせるようにするから、帰国する必要はない」⁹⁰などと宣伝したためでもある。

かくして、韓僑の送還においては、中国東北地区の葫蘆島から南朝鮮までの船便をアメリカ側が提供して、国民党占領区の各地から瀋陽、瀋陽から葫蘆島までの間の陸上輸送は、国民党が無賃で担当した。携帯物品は、1,000元（朝鮮貨幣）以内、布団衣類など行李500磅以内、金指輪、腕時計、万年筆各一つまでに限られていた。

一方、申肅と高文竜は12月9日釜山に着いて、京釜線で翌日ソウルに到着した。ソウルに到着してから、二人は中国東北地区国民党占領区内の東北同胞（東北地区居住朝鮮人のことを指す一筆者注）の状況を同胞に知らせるため、積極的な活動を行った。

まず南朝鮮米軍政庁を訪問し、「16万人の中央軍占領地区の同胞の中、飢餓に直面している4万人が帰国を希望し」⁹¹ているので、帰国希望者の船便の幹

旋などを要請した。申肅は自伝に、外務処を通して、数次朝鮮進駐アメリカ軍司令官ホッジ (John R.Hodge) に面会したが、成果はなかった⁸⁹⁾と書いている。また、1947年3月3日に立法議院に東北地区居住同胞の救出のため、調査救済団を派遣する請願書を提出した⁹⁰⁾。申肅など3人が調査委員に当選され、90万圓の予算を要求したが、南朝鮮米軍政当局は2、3ヵ月を経ても何らの反応もなく、東北調査団の件は実現できなかった。

申肅は、大韓独立促成国民会委員長曹成煥に金九との面会も依頼したが、断られた。曹成煥によれば、金九は東北地区居住朝鮮人の帰国問題に賛成せず、現在国内に引揚げた難民の救済も大変なので、国外にいる同胞まで救済することは困難であると冷たく拒絶した⁹¹⁾という。

また、申肅と高文竜は各新聞社を訪問して、この間、途絶した東北同胞の消息を伝えて、国内同胞の同情を求めた⁹²⁾が、その主な内容は、「国民軍が進駐している奉天、安東、新京、四平（これら地名は、資料の原文による。）などの16万人同胞中、3万人ないし5万人は帰国を希望してい」⁹³⁾て、米軍司令部に東北在留同胞に帰還の道を開いてくれるように要請することであった。

そのほかにも、解放後韓国で組織されたさまざまな戦災民の救援組織を訪れ、東北地区居住朝鮮人の帰国に便利を与えることを呼びかけて、大きな同情を受けた。戦災同胞援護会中央本部⁹⁴⁾では委員長趙素昂の名義で、満州同胞救出問題で南朝鮮米軍政府と折衝して、以下のような緊急救済対策建議書を送った。「1、中国政府との交渉代表を現地に派遣して、実情を調査し、東北同胞たちに衣類、薬品、食糧などを送ること。2、現地の当局（国民党当局を指す一筆者注）と交渉して可及的現地に安住させる。3、現地安住不可能の災民は無賃で営口まで汽車で輸送すること。4、輸送船便を営口に派遣して仁川港へ直接輸送すること」⁹⁵⁾であるが、その実施状況はあきらかになっていない。

2. 李圭東と「第二次東北韓僑送還計画」

1947年5月から始まった中共の国民党占領区に対する攻撃のため、国民党占領区の多くは交戦区域と化して、極貧韓僑はさらに増加した。各地の韓国僑民会の報告によれば、遼寧地区だけでも自ら南朝鮮への帰還を希望する者が、すでに1万人を越えていたという。国民党側は、これら生活が維持できない極

貧韓僑を急速に送還しないと、「地方の治安に影響する可能性は充分ある」⁹⁸と認識していた。

そこで、韓僑事務処が執行機構となって、遼寧地区の1万人の韓僑を南朝鮮へ送還する「第二次送還計画」⁹⁹が立てられた。この計画は、すでに東北行轅の批准を受けて、船舶問題が解決されると、ただちに実施することとなっていた。帰国を希望する各地の韓僑を汽車で瀋陽に集めて、瀋陽から葫蘆島までは車で輸送し、葫蘆島から南朝鮮の仁川、木浦、釜山など三港まではアメリカ側の船便で向かわせる計画だった。なお、給食、送還者の身分証、車票、船票、注射証は韓僑事務処が提供することとなっていた。ここで、問題となるのは船便であるが、韓僑事務処は、瀋陽の米軍に南京国民党政府と東京連合軍最高司令部との相談を依頼して、1947年10月初旬船舶を送ってくることを要請したが、計画通り行かず、遅延になった。

一方、李圭東¹⁰⁰と李恵澈¹⁰¹は南朝鮮に東北韓僑状況を報告し、その解決策を求めるため、東北行轅の許可を得て、1947年9月13日営口を出航していた¹⁰²。李圭東は南朝鮮に戻ってから、「帰ろうとしても帰り道が塞がれて、厳寒を眼前に凍餓死直前」¹⁰³の東北同胞の救出活動を全方面に展開した。具体的には、まずマスコミを通じて、国民党占領区における同胞の状況を紹介し、同情を求めた。李圭東は、10月29日漢城広播電台で「東北韓国僑胞の哀訴」という演説を行って、東北地区に帰国船を派遣することを呼びかけた¹⁰⁴。

マスコミのほか、李圭東は各社会政党、団体にも韓僑の帰還に対する協力を要請した。11月15日ソウル市内の厚生協会本部で、各社会団体代表50余人が集まって協議した結果、「1. 危急な状態にある2万余人の帰国の斡旋をすること。2. 在満同胞の安住楽業する法的根拠を樹立すること。3. 在満同胞に対して政治的その他すべての方面において根本対策を樹立すること。」¹⁰⁵を内容とする建議文を作成して南朝鮮米軍政当局に提出した。

11月22日付の『東亜日報』は、同胞の帰還問題について、「中央庁当局政務委員会で対策案が通過したので、在満同胞の緊急救出も解決される」¹⁰⁶はずだと予想しているが、実際には、難航を極めた。軍政庁長官代理が、在満同胞の帰還に努力する¹⁰⁷と表明したが、申肅と李圭東がいっしょに南朝鮮米軍政長官を訪問したところ、「一貫して微温的態度でわたしたちを応対して、何らの結果も得られなかった」¹⁰⁸という。

この間、東北地区での戦況の影響もあって、12月1日李圭東、李恵澈は金九、金奎植などに会って、韓僑の帰国の具体的方法を討議することとなって、米軍将校2人と李圭東、李恵澈、通訳2人が飛行機で瀋陽に向かって、各地に分散している同胞に連絡する一方、運輸部で帰還船舶を準備することとなった⁸⁰が、この計画の実行状況は明らかではない。

東北地区における国民党の占領区はますます縮小して、1948年3月には、瀋陽・長春・錦州など3つの孤立した都市しか残らず、瀋陽に集結していた国民党の各重要機関の要人は空中輸送で南下し始めた。こうした状況の下、大韓民国臨時政府駐東北弁事処責任者の李光は、韓国独立党中国総支部執行委員会委員長の閔石麟⁸¹に代表団職員と独立党幹部を切実に保護し、必要時は専用車あるいは専用機で危険から脱出できるように強力に要求していた。

そこで、まず韓僑のなかの2,000余人のリーダー、宗教家、教育者たちの救出が行われた。彼らを送還させるためには、瀋陽に集結後、1日1台ないし5台の飛行機で150人から250人ずつ金浦空港まで輸送することが必要となるが、2,000余人が全部帰還するには40~50台の飛行機を要し、これに少なくとも半月掛かった⁸²。瀋陽で飛行機が出発すると、外務処に電報を送って、外務処はただちに保健厚生部に連絡して、衛生隊と輸送隊を金浦空港に出動させ、韓僑の着陸と同時に消毒と税関検査を実施した。一人に1,000元ずつ応急救護費を支給し、入国の手続きを終えてからは、しばらく永登浦に設置された収容所に収容して、新しい生き道を開拓させた。

また、中国東北地区から天津に避難していた一般の韓僑10,000余人を8、9次にわたって帰還させた⁸³が、その経過は以下のようなものである。LST型米軍輸送船の救護船第一船が、1948年4月24日仁川を出発して、そこに避難している2,000余人の同胞を乗せて、5月7日仁川に戻った。また、4月30日釜山を出航した船は、避難同胞1,000人を乗せて5月15日仁川に帰った⁸⁴。5月16日に、外務処はマッカーサー司令部に船便の斡旋を要請して、日本船が仁川に入港した。この船は5月21日天津に派遣され、2,000余人の韓僑を乗せて仁川に戻った⁸⁵。また、釜山に停泊中であった輸送船丹陽号は第七回目の同胞輸送のため、8月20日仁川に入港して、翌日天津に出発した⁸⁶という報道がなされているが、これによりどれだけの人数がいつまでに帰還したのかは不明である。

おわりに

第二次世界大戦後、中国東北地区居住朝鮮人とくに北満州地区居住朝鮮人は土匪に虐殺されるなど厳しい環境に置かれることとなったが、それは、日本の朝鮮人の満州への移民政策、満州での民族分化政策など十四年間の満州支配の諸問題が、解放後に激化して表面に顕れたものだといえる。また、こういう厳しい環境は、当然ながら東北地区居住朝鮮人が母国の朝鮮へ引揚げの一つの契機となった。

東北地区居住朝鮮人の引揚げの人数については、解放後の混乱のため正確な統計は出ていないが、解放直後の1年を中心に、在満朝鮮人の約半分を占める100万人前後が、おもに南朝鮮に引揚げた。東北地区に残留した原因⁹⁹としては、解放直後の交通の断絶、戦争のため実行された証明証制度、中共の積極的な定住の勧めなどが挙げられる。このほかに、朝鮮に生活の基盤を持たない、旅費の不足、徴兵された息子を待ちつづけるなどの原因があった。

解放後に行われた東北地区居住朝鮮人の朝鮮への引揚げは、そのほとんどが自主的に行われたが、国民党占領区では送還計画が行われた。国民党は、中国関内地区における朝鮮人の南朝鮮への送還を終えた1946年から、東北地区の自分の占領区における朝鮮人に対し送還計画を実施した。船便の調達のため、僑民のリーダーである申肅・李圭東は南朝鮮に戻って、救援活動を展開するが、南朝鮮の米軍政の協力を得られず、送還計画は遅延されつづあった。ところが、1948年3月以後東北地区の急激な戦況の変化は、一挙に計画を促進したが、いつ、どれほどの人が引揚げたかについては解明できず、今後の課題として残されている。

[表1] 在満朝鮮人人口の推移 (1912年～1945年)

1912年	238,403	1929年	597,677
1913年	252,118	1930年	607,119
1914年	271,388	1931年	630,982
1915年	282,070	1932年	672,649
1916年	328,318	1933年	673,794
1917年	337,461	1934年	717,213
1918年	361,772	1935年	807,506
1919年	431,198	1936年	875,908
1920年	459,427	1937年	931,620
1921年	488,656	1938年	1,056,308
1922年	515,865	1939年	1,162,127
1923年	528,027	1940年	1,309,053
1924年	531,857	1941年	1,442,429
1925年	531,973	1942年	1,511,570
1926年	542,185	1943年	1,414,144
1927年	558,280	1944年	1,700,000
1928年	577,052	1945年	2,163,115

出典：①1912年～1918年の数字は、金炳鎬『中国朝鮮族人口簡論』中央民族学院出版社，1993年，53頁。②1919年～1936年までの数字は、玄圭煥『韓国流移民史 上』語文閣，1976年，ソウル，168頁。③1937年～1942年までの数字は、黄有福「中国朝鮮族民族移民史の研究」（中央民族学院朝鮮学研究所『朝鮮学 1993』民族出版社，1993年，北京），202頁。④1943年の数字は、李採珍著・鎌田光登訳『中国朝鮮族の教育文化史』コリア評論社，1988年，34頁。⑤1944年の数字は、周保中「延辺朝鮮民族問題（草案）」1946年12月，（延辺朝鮮族自治州档案局編・発行『中共延辺吉東吉敦地委延辺專署重要文件匯編 第1集 1945.11—1949.1』1985年），332頁。⑥1945年の数字は、張劍非「東北韓僑問題」（国民政府主席東北行轅韓僑事務処「韓僑事務」1，1947年8月，瀋陽，韓詩俊他『中国内韓国近現代関係資料』（復刻版）国史編纂委員会，1998年，京畿道果川），412頁による。

注：1911年までの在満朝鮮人の人口統計については不明である。

[表2] 朝鮮への引揚げ経路 (1947年7月現在)

安東を通して帰国した者	50万人
通化、江界を通して帰国した者	10万人
延辺を通して帰国した者	20万人
計	80万人

出典：朝鮮通信社『朝鮮年鑑 一九四八年版』（復刻版），驪江出版社，1983年，ソウル，350頁。

注：本統計は南朝鮮に引揚げた者に限っている。

- (1) 日本の敗戦以前に一般的に使用されていた「満州」や「間島」等の地名は、敗戦後には「中国東北地区」、「延辺」などの地名に変わったが、本稿でもこの一般的に使用されていた呼称を使う。
- (2) 「満州事変」以後における朝鮮人の満州移住については、松村高夫「日本帝国主義下における「満州」への朝鮮人移動について」(『三田学会雑誌』第63巻第6号, 1970年6月)が詳しい。
- (3) 本論文の研究対象としている現在の中国朝鮮族に対する呼称について、解放以前は「在満朝鮮人」、国共内戦期は「東北地区居住朝鮮人」、中華人民共和国の成立後は「中国朝鮮族」と表記した。ただ、国共内戦期国民党占領区に居住していた朝鮮人については、資料用語をそのまま引用し、「韓僑」と表記した。
- (4) 『朝鮮族簡史』編写組『朝鮮族簡史』延辺人民出版社, 1986年, 170頁。
- (5) 「ソ連には朝鮮北部を統治するための一貫した政策がなかっただけでなく、各道や地方の状況に合わせて政策を調整することもしなかった」(ブルース・カミングス著・鄭敬謨・加地永都子訳『朝鮮戦争の起源 第2巻 解放と南北分断体制の出現 1945年—1947年』シアレヒム社, 1991年, 584頁)。関連研究が希薄であるため、明確ではないが、ソ連には中国東北地区居住朝鮮人向けの政策がなかったと思われる。
- (6) 王元年他『東北解放戦争鋤奸剿匪史』黒竜江教育出版社, 1990年, ハルビン, 30頁。
- (7) 自分たちの問題を公の場で語ることが難しい状況を指す(大谷信介『社会調査へのアプローチ—論理と方法—』ミネルヴァ書房, 1999年, 京都, 222頁)。
- (8) 「満州国」と朝鮮総督府は1936年8月に「在満朝鮮人指導要綱」を作成し, 9月には朝鮮に鮮満拓殖会社, 満州に満鮮拓殖会社を成立した。1938年7月「鮮農取扱要綱」が決定されたが, そのなかには, 朝鮮人の満州への新規入植戸数は差当り毎年1万戸とする, 新規移住希望者に対し, 朝鮮総督府は移住地別に入植者を決定し, これに移住証明書を発給する, 新規入植者の土地選定および入植については地方行政機関, 鮮拓金融会他の関係機関が協力し必要に応じその指導援助をなす, 入植形態を集団, 集合, 分散とするなどの内容が入っている。1939年には「満州の開拓事業が愈々乗って来たため」12月22日に日本と「満州国」は「満州開拓政策基本要綱」を決定発表した。同要綱は満州における朝鮮人開拓民の数, 取扱, 助成などにおいて, 原則として日本開拓民に準ずることとしたものである。また, 1939年から1942年まで総計51,240戸の朝鮮人開拓民がおもに北満州に入植した(満州日報社『満州年鑑 昭和20年版』(復刻版)日本図書センター, 2000年, 204~205頁)。
- (9) 王元年前掲『東北解放戦争鋤奸剿匪史』, 30頁。
- (10) 元一禹 ハルビンの開業医で, 解放直後から朝鮮独立同盟北満特別委員会に携わっていて, 建国後は, 延辺医学院副院長などをつとめた(李義一・徐明勳編『朝鮮義勇軍三支隊』黒竜江朝鮮民族出版社, 1987年, 牡丹江, 214頁)。
- (11) 朱徳海 1911年ロシアの沿海州のある朝鮮人村の貧しい農家に生まれた。原籍は朝鮮咸鏡北道会寧郡で, 祖父の世代にロシアに移住した。「満州事変」の直前の1931年5月, 中共に入党して, 「満州事変」後には北満州で抗日武装闘争に参加した。1936年4月から1938年夏まで, 中共中央からソ連に派遣されて留学した。その後, 延安に入って, 抗日軍政大学東北幹部隊と中央海外研究班で勉強した。解放後の1945年11月に朱徳海は, 朝鮮義勇軍第3支隊を成立させる任務を持ってハルビンに到着した。朝鮮義勇軍第3支隊が創建されてからは, その政治委員をつとめ, 1948年4月に東北行政委員会民政部傘下の民族事務処処長に任命された。1949年1月の吉林省民族工作座談会を経た3月に延辺に派遣され, 5月に中共延辺地方委員会書記, 7月に延辺行政督察專員公署專員に任命された。1952年9月3日, 延辺朝鮮民族自治区が成立した後, 朱徳海は自治区の主席になって, 文化大革命で失脚するまでの間, 延辺の党・政・軍の首長として, 中国東北地区の政界でも大物であった。

- 10) 金英順他『朱徳海』実践文学社, 1992年, ソウル, 128頁。
- 11) リキョンフム 男性, 1920年生まれ, 本籍は京畿道「京城府」(「」は筆者による), 1989年現在, 瀋陽市嵩山東路に在住(中国朝鮮族青年学会『中国朝鮮族移民実録』延辺人民出版社, 1992年, 125頁)。
- 14) 謝文東 黒竜江省依蘭県人で, 有名な大地主である。日本の強制的土地買収に対抗した「土竜山事件」を指導して, その3,000人の隊伍をもとに東北民衆自衛軍を結成した。1936年9月, 共産党に帰順し, 東北抗日連軍第8軍軍長に任命された。しかし, 1938年日本軍に捕まえられて, 投降した。昭和天皇から, 金の菩薩をプレゼントされたという。解放後は, 共産党に帰順することを約束し, 三江人民自治軍司令になったが, 1945年12月中旬に公然と国民党に寝返った。密山を拠点に当地住民とりわけ朝鮮人に対して, 無茶苦茶に略奪, 殺人, 暴行を行っていた。1946年12月, 共産党によって死刑に処された(田志和・高楽才『関東馬賊』吉林文史出版社, 1992年, 長春, 327~330頁)。
- 15) 中国朝鮮族青年学会前掲『中国朝鮮族移民実録』, 128頁。
- 16) 姜聖仁 1986年現在, ハルビン市に在住(金賛汀「満州」・そこに打ち捨てられし者(完)」『世界』501号, 1987年5月, 332頁)。
- 17) 同上, 331頁。
- 18) 権寧浩「土匪たちの蛮行」(『中国朝鮮族歴史足跡』編集委員会『中国朝鮮族歴史足跡叢書 5 勝利』民族出版社, 1992年, 北京), 208~211頁。
- 19) 王元年前掲『東北解放戦争鋤奸剿匪史』, 145頁。
- 20) キムハクリョン「一つの信念の下」(李義一・徐明勳前掲『朝鮮義勇軍三支隊』), 118~134頁。
- 21) 徐基述他『黒竜江朝鮮民族』黒竜江朝鮮民族出版社, 1988年, 牡丹江, 89頁。
- 22) 周保中「延辺朝鮮民族問題(草案)」1946年12月(延辺朝鮮族自治州档案局編・発行『中共延辺吉東吉敦地委延辺專署重要文件匯編 第1集 1945.11—1949.1』1985年, 所収), 332頁。
- 23) 高元鶴「非難記」(『世風』創刊号, 1946年4月, 大田), 45頁。
- 24) 鄭吉雲「東北第7支隊で」(『朝鮮義勇軍足跡』編写組『在遼闊的中国大地上』延辺人民出版社, 1987年), 569頁。
- 25) キムリスク 男性, 1911年生まれ, 本籍は平安北道博川郡, 1989年現在, 瀋陽市和平区西塔に在住(中国朝鮮族青年学会前掲『中国朝鮮族移民実録』, 86頁)。
- 26) 同上, 87~88頁。
- 27) 国史編纂委員会編・発行(『韓国独立運動史 資料27 臨政篇VII』1994年, 京畿道果川), 73頁。
- 28) 林昌培「長春「5・23」惨事」(『中国朝鮮族歴史足跡』編集委員会前掲『中国朝鮮族歴史足跡叢書 5 勝利』), 599~600頁。
- 29) ウォンシヒ「民族の大災難」(同上, 596~598頁)。
- 30) 申肅『わが一生』日新社, 1963年, 162~163頁。
- 31) 崔海岩『朝鮮義勇軍第一支隊史』遼寧民族出版社, 1992年, 瀋陽, 20頁。
- 32) 馬喜山 1893~1951年。黒竜江省寧安県の農民出身。「満州事変」後, しばらく抗日闘争をしたが, 後に寝返りした。解放後, 10人を集めて汪清県春陽治安隊を組織し, 1ヵ月の間に400余人に拡大させた。11月16日, 国民党保安軍第2師司令鄭雲峰と会って, 少将・旅長に任命された。彼の部隊は, いたるところで, 殺人と略奪を行ったが, そのなかでも朝鮮人の被害が大きかった。1946年2月, 延辺警備部隊と汪清保安団は牡丹江軍区傘下の部隊の協力をえて, 馬喜山に対する総攻撃を始めた。馬喜山は大敗し, その後は吉林市, 長春市に匿れ住んでいたが, 1951年1月捕まえられて, 寧安県朝鮮中学運動場で処刑された(田志和・高楽才前掲『関東馬賊』, 335~339頁)。
- 33) 『延辺朝鮮族自治州概況』編写組『延辺朝鮮族自治州概況』延辺人民出版社, 1984年, 90頁。
- 34) 周保中前掲「延辺朝鮮民族問題(草案)」, 356頁。

- 35) 安藤彦太郎「延辺紀行」(東京大学東洋文化研究所『東洋文化』36, 1964年3月), 46頁。安藤氏をはじめとする日本朝鮮研究所代表団は, 1963年夏に北朝鮮を訪れた後, 9月3日~5日は中国延辺を訪れたが, これは解放後にはじめて延辺を訪れた日本人だそうだ。彼らは, 朱徳海, 林民鎬などに会った。
- 36) ハンテクス「解放を祝う日」(『中国朝鮮族歴史足跡』編集委員会前掲『中国朝鮮族歴史足跡叢書5 勝利』), 4~7頁。
- 37) 水野直樹「朝鮮人の国外移住と日本帝国」(杉原薫他『岩波講座 世界歴史 19 移動と移民: 地域を結ぶダイナミズム』岩波書店, 1999年), 269頁。
- 38) 延辺地委「延辺地委関于延辺民族問題」1948年8月, (延辺朝鮮族自治州档案局編・発行『中共延辺吉東吉敦地委延辺專署重要文件匯編 第1集 1945.11—1949.1』1985年), 384頁。
- 39) 同上, 128頁。
- 40) 高元鶴前掲「避難記」, 43~48頁。おそらく, 高元鶴は精米所経営者だと思われる。
- 41) 張劍非前掲「東北韓僑問題」, 412頁。張劍非は, 国民党の外交部東北特派員で, 1947年4月から韓僑事務処処長を兼任していた。
- 42) 朝鮮通信社前掲『朝鮮年鑑 一九四八年版』, 350頁。
- 43) 「東北同胞救出の推進具体化」(『漢城日報』1947年12月5日)。『漢城日報』は韓国独立党の影響下に置かれていた新聞である。
- 44) 前掲「東北収復区全僑民大会で報告された各地韓僑の現況要略」, 70頁。
- 45) 崔泰山「東北地区韓僑問題」(国史編纂委員会前掲『韓国独立運動史 資料27 臨政篇Ⅶ』), 65頁。崔泰山は, 瀋陽人で, 解放直後の韓国臨時政府東北特派員である。
- 46) 徐範錫「満州情勢と朝鮮人問題」(『新太平洋』5, 1947年7月), 頁数なし。徐範錫は, 満州帰還同胞同志会に所属していた。
- 47) 朝鮮通信社前掲『朝鮮年鑑 一九四八年版』, 355頁。
- 48) 周保中前掲「延辺朝鮮民族問題(草案)」, 333頁。
- 49) 「極貧同胞を迎えよう」(『漢城日報』1947年11月19日)。
- 50) 「解放の喜びも夢一場」(『東亞日報』1946年9月7日)。
- 51) 南朝鮮軍政庁の調査によれば, 1947年6月現在, 中国関内地区から71,611人, 中国東北地区から504,391人, 日本から1,104,407人が南朝鮮に引揚げた。このほかに, 公的手続きなしに引揚げた人数は60万人以上だという(朝鮮通信社前掲『朝鮮年鑑 一九四八年版』, 358頁)。
- 52) 前掲「極貧同胞を迎えよう」。
- 53) 「10万人東北同胞の惨景」(『独立新報』1947年11月13日)。
- 54) 朝鮮通信社前掲『朝鮮年鑑 一九四八年版』, 351頁。
- 55) 袁常恩前掲「東北韓僑史略」, 414頁。
- 56) 韓武吉・梁在華「解放初期牡丹江市朝鮮人民民主同盟の活動」(延辺歴史研究所編・発行『延辺歴史研究』1, 1986年), 122頁。
- 57) 金東和他『延辺党史事件與人物』延辺人民出版社, 1988年, 269頁。
- 58) 宋求憲 男性, 1986年現在, ハルビン市郊外の新新村に在住(金贊汀前掲「満州」・そこに打ち捨てられし者(完)), 330頁)。
- 59) 同上, 331~332頁。
- 60) 「住民証および旅行証の使用に対する新弁法」(『延辺日報』1948年4月28日)。
- 61) 解放区における旅行証制度は, 1949年8月15日になって「人民の来往時の便利を提供する」ため, 「東北住民が東北解放区境内で旅行する時の居民旅行証明と農村旅行証制度を一律に取消す」こととなった(「東北政委会通令」『延辺日報』1949年8月29日)。
- 62) 朝鮮通信社前掲『朝鮮年鑑 一九四八年版』, 354頁。

- 63 申肅 1885年—1967年。1903年12月東学党に参加し、三・一運動の際に逮捕される。1920年天道教代表人物として上海大韓民国臨時政府に推薦されて、中国で独立運動を展開した。「満州事変」後、韓国独立軍参謀長として、双城県攻略戦などに参加し、韓族自治連合会を組織した。1933年南京・上海等地に派遣され、国民党政府と緊密な連係を取っていた。解放後組織された吉林韓国人会委員長に当選し、東北地区居住朝鮮人の救済と帰国の斡旋につとめた(韓国精神文化研究院前掲『韓国人物大辞典』)。
- 64 高文龍 医学博士。1943年に「満州帝国」建国10周年を記念して、「新京」の親日朝鮮人新聞社である満鮮学海社で発行した『半島史話と楽土満州』に「満州の最近医学発達概史」を寄稿した。解放後は四平韓国僑民会会長をつとめた(南昌竜『満州帝国朝鮮人』シンセリム、2000年、ソウル、150頁)。
- 65 「東北韓国僑民会代表申肅・高文竜が帰国して、在満同胞の消息を伝える」(『東亜日報』1946年12月12日)。
- 66 金英順前掲『朱徳海』、137頁。
- 67 韓武吉・梁在華前掲「解放初期牡丹江市朝鮮人民民主同盟の活動」、122頁。
- 68 『朝鮮族簡史』編写組前掲『朝鮮族簡史』、184頁。
- 69 金贊汀前掲「満州」・そこに打ち捨てられし者」、332頁。
- 70 キムスキョン 男性、1919年生まれ、本籍は慶尚北道大邱、1989年現在、瀋陽市皇姑区に在住(中国朝鮮族青年学会前掲『中国朝鮮族移民実録』、92頁)。
- 71 同上、96頁。
- 72 金贊汀前掲「満州」・そこに打ち捨てられし者」、332頁。
- 73 河東安全農村は、現在の黒竜江省尚志県河東朝鮮族郷の前身である。1932年冬、一面坡朝鮮居留民会会長金余白は、東亜勲業株式会社と結託して、河東で安全農村を設置することを検討した。彼らは、強制的に農民の土地を買収し、原住民を移住させ、1933年4月ハルビンに滞在している朝鮮「難民」577戸・2,492人を移入させ、安全農村を作り出した。その後も、開拓計画によって、1934年に106戸・508人、1939年に70戸・371人を移入して、1939年末には、753戸・3,371人が居住していて、水田1,700町歩、畑500町歩の規模を持つようになった(尚志市地方志編纂委員会『尚志県志』中国展望出版社、1990年、北京、567~568頁)。
- 74 鄭判竜 文学者、延辺大学元副学長である。1932年韓国全羅南道潭陽郡に生まれて、幼い時親に連れられ、北満州の河東安全農村で育った。1952年延辺大学卒業、1960年モスクワ大学で文学副博士号を取得した。著書には、『世界文学簡史』、『鄭判竜文集』などがある。
- 75 中国朝鮮族青年学会・館野哲他訳『聞き書き 中国朝鮮族生活誌』社会評論社、1998年、230頁。原本は、中国朝鮮族青年学会前掲『中国朝鮮族移民実録』である。
- 76 李将範 男性、1986年現在、ハルビン市郊外の新星村に在住(金贊汀前掲「満州」・そこに打ち捨てられし者(完)」、330頁)。
- 77 同上、331頁。
- 78 同上、335~336頁。
- 79 袁常恩「東北韓僑救済概況」(国民政府主席東北行轅韓僑事務処前掲『韓僑事務』2)、423頁。
- 80 廉仁鎭「解放後韓国独立党の中国関内地方での光復軍拡軍運動」(歴史問題研究所『歴史問題研究』創刊号、1996年、)312頁。また、中国関内における日本人軍人・民間人の8割以上は、1946年5月までに日本に引揚げた(加藤陽子「敗者の帰還—中国からの復員・引揚問題の展開」『国際政治』109、1995年5月、124頁)。
- 81 「在満同胞送還開始」(『朝鮮人民報』1946年5月4日)。
- 82 「東北復員計画綱要草案」南京第二歴史档案馆、全宗171—巻91(劉信君前掲『中国東北史 第6巻』、693頁から再引用)。

- 88) 前掲「国民党の東北保安司令長官司令部の韓僑処理臨時弁法」, 78~79頁。
- 89) 「糊口の策も遙か」(『漢城日報』1946年12月14日)。
- 90) 朴元陽 親米派人物で、当時瀋陽米領事館職員をつとめていて、教会長老でもあった。南朝鮮に戻ってからは米軍政につとめた。
- 91) 葫蘆島は、遼寧省錦西県錦州湾と連山湾の間に位置していて、渤海に向いている。中国東北地区と関内地区を連結する戦略要地である。
- 92) 謝松泉「東北韓僑送還概況」(國民政府主席東北行轅韓僑事務所前掲『韓僑事務』3), 431頁。
- 93) 仁川には2,229人、釜山には254人登陸した。
- 94) 金九自身は駐韓米占領軍に、大韓民国(重慶)臨時政府は政府として行動する考えがないという誓約書を書かせられて、14、5人の支持者と1945年11月23日にソウルに戻った(ブルース・カミングス著・鄭敬謨・林哲訳前掲『朝鮮戦争の起源 第1巻 解放と南北分断体制の出現 1945年-1947年』, 262頁)。他方、朴賛翊など韓国独立黨員たちは、国民党政府との連絡などのため中国に残って、大韓民国臨時政府駐華代表団の名義で活動していた。
- 95) 申肅前掲『わが一生』, 166頁。
- 96) 「東北韓国僑民会代表申肅・高文竜が帰国して満州にいる同胞の消息を伝える」(『東亜日報』1946年12月12日)。
- 97) 申肅前掲『わが一生』, 175頁。
- 98) 「在満百万同胞の救出一議から当局に正式請願」(『東亜日報』1947年3月5日)。
- 99) 申肅前掲『わが一生』, 175頁。なお、解放してから1947年6月まで世界各地から公式の手続きを経て、南朝鮮へ引揚げた人数は総計1,708,028人である。そのなかには、中国東北地区から引揚げた504,391人、中国関内地区から引揚げた71,611人、日本から引揚げた1,104,407人が含まれている(朝鮮通信社前掲『朝鮮年鑑 一九四八年版』, 358頁)。
- 100) 「東北韓国僑民会代表申肅・高文竜が帰国して満州にいる同胞の消息を伝える」(『東亜日報』1946年12月12日)。
- 101) 「在満同胞帰国問題、早速解決を要路に陳情」(『独立新報』1946年12月17日)。
- 102) 帰国戦災同胞の救済を目的とし、趙素昂など20余人が発足した帰国戦災同胞救済会中央本部は1946年7月24日ソウル市で成立した(「帰国戦災同胞救済会中央本部の創立大会が開催される」『東亜日報』1946年7月24日)。
- 103) 「災民援護会から建議」(『東亜日報』1946年12月12日)。
- 104) 謝松泉前掲「東北韓僑送還概況」, 432頁。
- 105) 同上。
- 106) 李圭東は、当時韓国駐華代表団東北総弁事処僑務局長、東北韓僑民会連合会理事長をつとめた(「韓国駐華代表団東北総弁事処職員表」・「東北韓国僑民会連合会職員表」國民政府主席東北行轅韓僑事務所前掲『韓僑事務』1, 418頁)。
- 107) 李惠澈は、当時瀋陽韓国僑民会会長をつとめた。
- 108) 「処内簡訊」(國民政府主席東北行轅韓僑事務所前掲『韓僑事務』2), 426頁。
- 109) 「海外同胞を救おう」(『漢城日報』1947年11月19日)。
- 110) 「処内簡訊」(國民政府主席東北行轅韓僑事務所前掲『韓僑事務』3), 438頁。
- 111) 「在満同胞の帰国を各政党社会団体に建議」(『独立新報』1947年11月18日)。
- 112) 「死線にいる在満同胞緊急救出を建議、政党、社会団体総決起」(『東亜日報』1947年11月22日)。
- 113) 「ヘルミック長官代理言明-在満同胞帰還に努力」(『漢城日報』1947年10月16日)。
- 114) 申肅前掲『わが一生』, 177頁。
- 115) 「東北同胞救出推進具体化 2万余帰還促進、輸送出船舶など準備も進展」(『漢城日報』1947年

12月5日)。

- 010 「韓国独立党中国総支部各級党部責任者住所一覧表」(上海市档案馆前掲『中国地域韓人団体関係史料匯編(二)——上海市档案馆藏民国時期档案史料』, 126頁。
- 011 「三万在満同胞の一部飛行機で輸送中」(『東亜日報』1948年4月3日)。
- 012 申肅前掲『わが一生』, 181頁。
- 013 「在満同胞輸送船, 30日釜山出航」(『東亜日報』1948年4月28日)。
- 014 「在満同胞輸送のためマッカサー司令部日船を派遣」(『東亜日報』1948年5月20日)。
- 015 「在満同胞輸送船天津へ出航」(『東亜日報』1948年8月22日)。
- 016 本稿は, すでに定着している場合を論じていない。